

平成 2 3 年 1 月 2 8 日

日本弁理士会
会長 筒井 大和 様

知的財産価値評価推進センター
センター長 久保 司

報 告 書

経済産業省の知的資産経営 WEEK2010 への参加イベントの終了報告について
別紙のとおり報告いたします。

知的資産経営 WEEK2010 参加イベント

「知的資産経営フォーラム 2010」

不況を乗り越える企業経営、“知的資産経営”の本質を知る。

－ “中小企業の信用”を高め、維持する“知的資産経営”のための
“知財プランニング”の必要性を考える。－

1. 日 時： 平成22年11月25日（木） 午後1時～5時
2. 場 所： 全社協・灘尾ホール（東京都千代田区霞が関3-3-2 新霞が関ビル）
3. 主 催： 日本弁理士会
4. 後 援： 経済産業省、特許庁、中小企業基盤整備機構、日本商工会議所、
東京商工会議所、(社)全国地方銀行協会、(社)全国信用金庫協会
5. 人 数： 223名（会員92名、一般117名、プレス1名、関係者13名）
6. 内 容： 以下のとおり

13:00-13:05 主催者挨拶 正林 真之（日本弁理士会 副会長）

13:05-14:20 企業講演 元気な中小企業は、なぜ、輝いて見えるのか？

「定年のない会社のものづくり、人づくり」

講師 西島 篤師 氏（西島(株) 代表取締役社長）

「他人のやらないことをやる」～オンリーワン企業を目指して～

講師 本多 克弘 氏（本多プラス(株) 代表取締役社長）

「誰もやらない。だからやる。世界を制した町工場の独創力・行動力」

講師 白木 学 氏（シコー(株) 代表取締役社長）

14:20-14:45 施策説明 経済産業省の推進する知的資産経営

（約25min）

「営業秘密の保護と知的資産経営の新展開」

講師 中原 裕彦 氏（経済産業省 経済産業政策局 知的財産政策室 室長）

14:45-15:00 休 憩

15：00－15：30 日本弁理士会プレゼンテーション

(30min) 「これからの弁理士は、どのようなサービスを提供できるか」
プレゼンター

知的財産価値評価推進センター	センター長	久保 司
知財流通・流動化検討委員会	委員長	根本 雅成
知財経営コンサルティング委員会	副委員長	鈴木 正剛

15：35－16：55 座談会

(80min) 「“中小企業の信用”を高め、維持する“知的資産経営”のための
“知財プランニング”の必要性を考える。」

パネリスト 石原徹弥氏（経済産業省 経済産業政策局 知的財産政策室 課長補佐）
西島篤師氏、本多克弘氏、白木学氏、中原裕彦氏、プレゼンター弁理士
座 長 石田喜樹（日本弁理士会知的財産価値評価推進センター副センター長）

16：55－17：00 閉会挨拶 久保 司（日本弁理士会知的財産価値評価推進センターセンター長）

7. 概 要：

（第1部） 企業講演

元気な中小企業は、なぜ、輝いて見えるのか？

定年のない会社のものづくり、人づくり

講師 西島 篤師 氏（西島(株) 代表取締役社長）

講演概要

- （1）原点は「腐っても鯛」：品質性能で日本一、世界一である。
- （2）会社には変えてはいけないものがある。それを守るために変えなければなら
ないものがある。
変えてはいけないもの＝創業者精神、社風
- （3）変えてはいけないものを変えたときに会社の危機となる。
- （4）「一生元気、一生現役」←まず人づくりから→人が資源、人が宝。
ゆえに定年制なし
- （5）現在に至る経緯
1995年バブル経済崩壊→不況ではなく、変化の時代だと思った。
お客さんを回った→脱自動車とグローバル化に決めた。
- （6）西島の特長
 - ① 自社一貫生産システム：ノウハウ・技術を自社内で育て蓄積する。
 - ② 多能工の育成：少数精鋭とする
 - ③ 自社事業とは異なる分野から誘い→社長の決断でやると決めた。
・農業分野向け専用機 ・人工膝関節
 - ④ ベテランの技術者の力により、やり遂げた。
 - ⑤ 定年のない会社へ。 → 勤続60年の社員がいる。

「他人のやらないことをやる」～オンリーワン企業を目指して～

講師 本多 克弘 氏（本多プラス(株) 代表取締役社長）

講演概要

- (1) 本社工場、東京事務所(クリエイティブオフィス)などの紹介。
- (2) 一つの技術で様々な事業を展開する。例えば、文具、医療、工具など。
- (3) ログセは「できる。できる。必ずできる。」
お客様からの難しい依頼に対して、できないと断ることはない。
そこから新しい技術や発明が生まれる。
- (4) 運をつけることが大事である。人生、8割は運。
- (5) 他人がやらないことをやる。
 - ① 展示会への出展を積極的に行っている。
製品や技術の使い方はお客様が決めるものである。
 - ② 不景気のときに伸ばす。景気は自ら作る。
- (6) 社針ー給料はお客様からいただくものと認識しよう。
- (7) 会社の発展の経緯
 - ① ブロー成形技術を中心に事業展開している。
 - ② 筆の産地の豊橋で、セロファンによる鞘を製作したことが始まり。
 - ③ 父の教え「下請けメーカーにはなるな」。金型の内製化を始めた。
 - ④ 現在では、文具を始め、化粧品分野、医療、工具など多分野に事業を拡大している。
- (8) 特許について・・・祖父や父の代から、発明や特許に重点を置いている。
 - ① 顧客からの依頼で作製した小型多層化ボトルで、特許問題が生じた経験がある。
 - ② ドイツの企業から警告を受けたことがあり、対応に苦労した。
現在はその企業と家族ぐるみの良い関係を築いている。

「誰もやらない。だからやる。世界を制した町工場の独創力・行動力」

講師 白木 学 氏（シコー(株) 代表取締役社長）

講演概要

- (1) 私の言おうと思っていたことが、他のお二方のおっしゃっていることとあまりにも似ていてびっくりしている。
- (2) ロゴは、ロダンのマークをモチーフに従業員が自然発生的に作った。
- (3) 製品の歴史
 - ① インテルのファンモータ ② 振動モータ ③ オートフォーカスモータ
 - ーモトローラ社が何に振動モータを使うのかはじめはわからなかった。
- (4) 事業に関係するすべての技術がコアレス・モータの技術から派生している。
- (5) お客様の言うことを一切聞くなと従業員には言っている。
自分が欲しいものを作っている。
- (6) インテル社から「こんなぼろいところとは思わなかった。」と言われたが、ぼろいところで作るということと、いいものを作るということは矛盾しない。いいものを作るためにお金を使っている。
- (7) 今は、日本で開発・設計を行い、上海で試作の途中から製造まで行っている。

- (8) すべてまったく新しいことを考えてものをつくっている。
はじめのシェアはいつも100%。
- (9) 最近では、日本の弁理士費用・庁費用が高いと考え、中国で先に出願して、中国で有効な特許を日本に出願するようにしている。
- (10) 中国では、特許出願の費用に補助金を出している。また、特許に出した費用の1.5倍を経費として計上していいというようになっている。日本の特許制度は、特許出願をさせないような制度になっているのではないかと。
- (11) 特許で日本政策投資銀行が1億円融資してくれたことがある。たいへんいいことだと思う。知財を評価してお金に換える仕事を弁理士にもっとやってもらいたい。
- (12) 若い人のいい発明を奨励するような賞の創設をやってほしい。

(第2部) 施策説明 経済産業省の推進する知的資産経営

「営業秘密の保護と知的資産経営の新展開」

講師 中原 裕彦 氏（経済産業省 経済産業政策局 知的財産政策室 室長）

- (1) 営業秘密管理指針（改訂版）の説明
- (2) 特に使って欲しいもの
- 参考資料1 営業秘密管理チェックシート
- 参考資料2 各種契約書等の参考例

(第3部) 日本弁理士会プレゼンテーション

「これからの弁理士は、どのようなサービスを提供できるか」

プレゼンター

知的財産価値評価推進センター センター長 久保 司
知財流通・流動化検討委員会 委員長 根本 雅成
知財経営コンサルティング委員会 副委員長 鈴木 正剛

- (1) コンサル委員会のプレゼンテーション
- ① 2007年4月発足の委員会。
- ② コンサルティング研修、IPBAの説明。
- (2) 流通・流動化委員会のプレゼンテーション
- ① 取り組んできた内容（信託・知財金融・ビジネスモデルの検討）の紹介。
- ② 知財信託についての説明。
- ③ 知的資産経営報告書への弁理士の関わり方の検討開始。
- (3) 評価センターのプレゼンテーション
- ① 評価人の支援体制等についての説明。
- ② 金銭的評価、知財力の可視化、手引き等について。

(第4部) 座談会

「“中小企業の信用”を高め、維持する“知的資産経営”のための

“知財プランニング”の必要性を考える。」

パネリスト 石原徹弥氏（経済産業省 経済産業政策局 知的財産政策室 課長補佐）

西島篤師氏、本多克弘氏、白木学氏、中原裕彦氏、弁理士

座長 石田喜樹（知的財産価値評価推進センター 副センター長）

(1) 経営理念とロゴマークにかける思い

○西島社長

- ・ロゴマークは、創業者精神を生かし、新しい時代に向かう、という気持ちで作成した
- ・外国人に発音しやすいようにした
- ・真ん中の「j」：人を表す（中心に位置する）、上の点が地球を表す
「人を中心に、地球に貢献する」

○本多社長

- ・「プラス」はプラスチック、プラス思考を表す
- ・太陽と月のマークを入れている→日進月歩の集団を表す、これら2つに守られている

○白木社長

- ・「思考」からきた。物まねをしない
- ・ロダンのマーク（社員が考えた、自然発生）

(2) なぜ輝いて見えるか

○弁理士 弁理士センター

- ・ブランディングがうまくいっているから

(3) 元気な中小企業は、弁理士・知財をどの様に活用してきたか

○西島社長：・先代は特許不要と考えていた。→ 時間もお金もかかるので、特許を取る前に次の新しい開発をすべきという考えだった。

- ・顧客のニーズを実現することは、ビジネスチャンスであるが、そのためには誰もやっていない新しい知恵が必要。
- ・先行技術調査と早期審査制度は、特に活用している。

○本多社長：・父が筆の鞘で実用新案権を取得していた。

- ・弁理士との関係では、出願のときだけでなく相談の段階が大事なので、顧問契約が有効である。日頃の相談相手になってもらう。
- ・愛知県の中小企業振興のための助成金を受けたことがある。弁理士の書類が有効だった。

○白木社長：特許を重要視している。

- ・学生時代に特許研究部を作ったほど、特許に興味を持っていた。
- ・800件ほどの明細書を自分で作成した経験がある。
- ・弁理士に書いてもらおうと難解な言葉を使うので、もっと書きやすいようにするべきだと思う。ただし、権利範囲などについての相談は、弁理士と行うことが必要。
- ・発明協会は発明を奨励していない。若い発明家に、日本弁理士会等から発明奨励金を出すような企画を望む。

（４）知的資産経営において弁理士が提供できるサービス

○弁理士プレッシャー

- ・ 知財プランニングについて説明。
- ・ 価値創造の大切さを強調。
- ・ 将来をシミュレーションして、最適な知財の組合せをデザイン。

（５）価値評価とは

○弁理士プレッシャー

- ・ 価値評価の意味を広く捉えている。知財がどんな風に役に立っているのか
- ・ 役立つのかという知財力を判断するのが価値評価であると捉えている。

（６）知財の活用と価値評価

○弁理士プレッシャー

- ・ 知財流動化事務局を設ける構想がある。
- ・ ライセンシングの場面での知財流動化事務局の果たす役割について説明。
- ・ 融資事業・証券課事業について説明。

（７）弁理士の新サービスについて

○白木社長：特許の証券化に興味がある。１０億円ぐらいの資金調達があればいい。

出願費用、弁理士費用、年金を資産計上して償却ができるようにしてほしい

○西島社長：もっと企業の中に深く入ってきて欲しい

○本多社長：顧問契約をすればよい。社員が弁理士にいろんな相談できるから

（８）営業秘密・ベストチョイス・契約

○石原氏：営業秘密の管理によって、人的資産を構造資産に変えることの重要性、資産を構造化することの意義について説明。

・チェックシートの活用について説明。契約の商慣行、従業員や他社との契約。

（９）イノベーションを起こし、発展させるには

（「（７）弁理士の新サービスについて」の流れから。）

○白木社長：特許の証券化に興味がある。１０億円ぐらいの資金調達があればいい。

出願費用、弁理士費用、年金を資産計上して償却ができるようにしてほしい。

○西島社長：弁理士は、身内と思って扱っている。もっと企業の中に深く入ってきて欲しい。実践・現実・現場を見て対応して欲しい。

○本多社長：顧問契約をすればよい。社員が弁理士にいろんな相談できるから。

８．その他（メディアによる報道）：

このたびの催しに関連して、複数の新聞による報道がなされた。

- （１）東愛知新聞（愛知県豊橋市） 2010年11月26日
- （２）毎日新聞 2010年12月8日 朝刊9面
- （３）フジサンケイビジネスアイ 2011年1月20日 [12-13面](#) （別紙参照）

以上